

『新春によせて』

一般財団法人 函館国際水産・海洋都市推進機構 推進機構長 嵯峨 直恒



嵯峨推進機構長

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては佳き新春をお迎えのことと拝察申し上げます。

さて、当機構も今春で組織の設立から16年、そして海洋研究センターの開所から11年と年を重ね、次の4つの主要施策①水産・海洋に関する学術研究機関の集積 ②地域と学術研究機関の連携 ③観光と学術研究の融合 ④水産・海洋と市民生活の調和を柱に掲げ、産学官連携による新産業の創出、雇用の創出を促し、ひいては産業・経済の活性化に繋げる「国際的な水産・海洋に関する学術研究拠点都市」の形成を目指してきたところであります。

①に関連しては、6つの学術研究機関と、民間企業6社の試験研究機関が入居しており、各々の入居機関では水産・海洋領域に関連した研究開発が行われ、多くの成果を上げつつあります。

②に関連しては、地域の重要な水産資源であるイカの資源動向に関する研究や昆布の増養殖技術に関する研究、そして海洋観測に関する機器開発に向けた研究などが行われています。また、生産量の変動に晒される天然の水産資源に頼る漁業経営のリスクを補うため、地域の重要な水産資源を対象とした増養殖振興に向けた取り組みも、海洋研究センター入居機関や地域の産学官の皆様との連携により始まっております。また、令和3年(2021年)から、函館市や北海道大学、そして当機構の三者共同による「キングサーモンの養殖」に関する研究開発が行われており、令和4年(2022年)からは、函館圏の産学官の協働による、キングサーモンとマコンプの完全養殖などを目的とした、内閣府の地方大学・地域産業創生交付金事業(通称「函館マリカルチャープロジェクト」)に採択され、当機構がその事務局機能の一端を担うこととなりました。この中で、「キングサーモンの養殖」に関しては、わが国で初めてキングサーモンの種苗生産と中間育成に成功し、昨年末函館海域で小規模ではありますが海面養殖試験へと至ることができました。

③、④に関連しては、昨年も「マリンフェスティバル」をはじめ、海に親しんでもらうためのイベントなどのアウトリーチ活動を開催し、市民・観光客の皆様には多数ご参加いただきました。

ところで、昨年もイカ・シロサケの不漁、天然物昆布の不作など、地域の水産・海洋産業にとっていっそう厳しい年となりましたが、その一方で、入居機関を主とした産学官連携による函館圏でのサーモン類養殖の小規模な実施やコンプ類の完全養殖の試みなど、新しい養殖産業、食関連の新産業の育成による地域振興の展望が見えて来た年でもありました。当機構としても、入居研究機関の方々とスクラムを組み、しっかりと地域の課題に向き合い、かつ、地域の産学官金、市民の皆様と連携して、水産・海洋を基軸とした地域の発展を切り拓いてゆく所存です。

結びにあたりまして、皆様の本年のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



『海のカナリア・スルメイカの復活を願って』

一般財団法人 函館国際水産・海洋都市推進機構 函館頭足類科学研究所 所長 桜井 泰憲



桜井所長

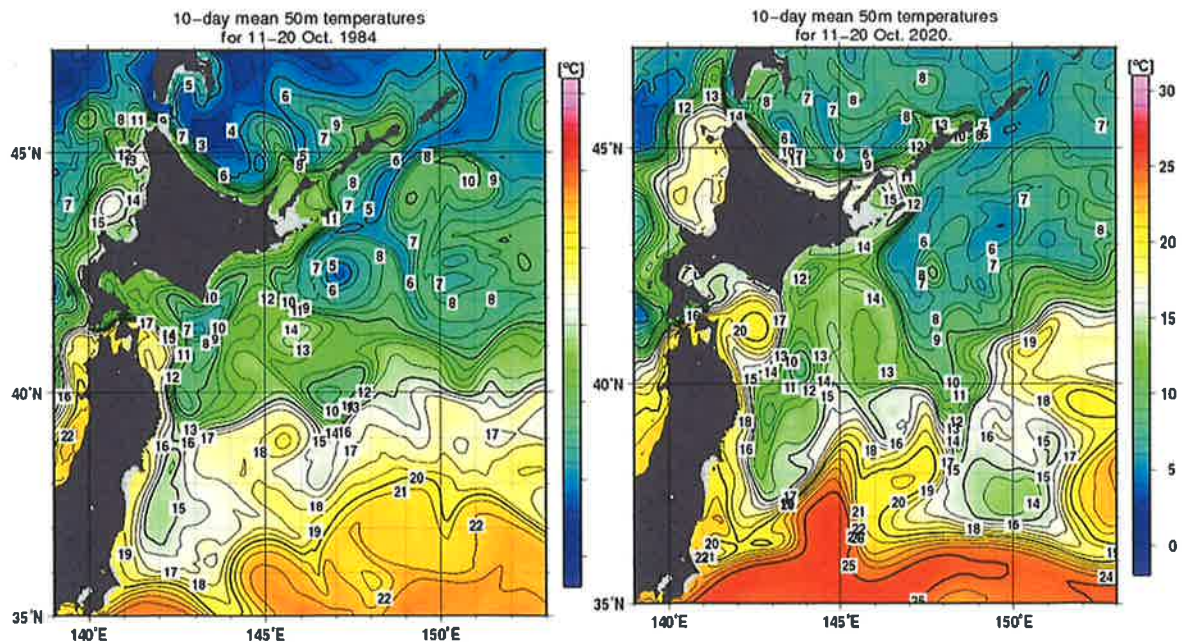
明けましておめでとうございます。令和7年、新たな年を迎えるにあたり、当推進機構に2016年4月に開所して9年目を迎えます函館頭足類科学研究所所長の桜井泰憲よりご挨拶申し上げます。当研究所の主な業務は、水産・海洋科学分野の調査・研究、特にイカ・タコ類、ブリ、クロマグロ、タラ類を含む漁業対象種の生態・資源研究、および高鮮度付加価値化や有効利用に関する研究と啓発活動、さらに環境変化に应答する漁業対象種の資源変動の解明と将来予測、新たな産業の創出などにもアドバイスを続けています。

昨年もわが国の水産業には不運な出来事が数多く起きています。スルメイカ、サケなどの不漁、特に道南ではスルメイカのかつてない不漁が依然として続いています。こうした水産業の低迷の要因として、確実に進行する地球温暖化の影響を無視できない状況になっており、昨年は世界の平均海水温も過去最高になっています。参考までに、北日本の海水温が低かった1984年と2020年10月中旬の海水温分布の比較を図1に示します。この40年間経過した北海道周辺の海水温も確実に上昇し、北洋から産卵回帰するサケの南下阻害、サンマ資源の激減と漁場の沖合化、全道沿岸の定置網やサケ建網にも、暖海性回遊魚のクロマグロ、ブリが入網しています。近年は、道南でも富山湾が北限とされるアオリイカ（通称：スマイカ）が漁獲されています。

図1. 1984年と36年後の2020年10月中旬の水深50mの水温分布の比較

北海道を取り囲む海の水温も、温暖化が進行中！

1984年と2020年(36年後)10月中旬の水深50mの水温分布の比較



気象庁：海洋の健康診断表

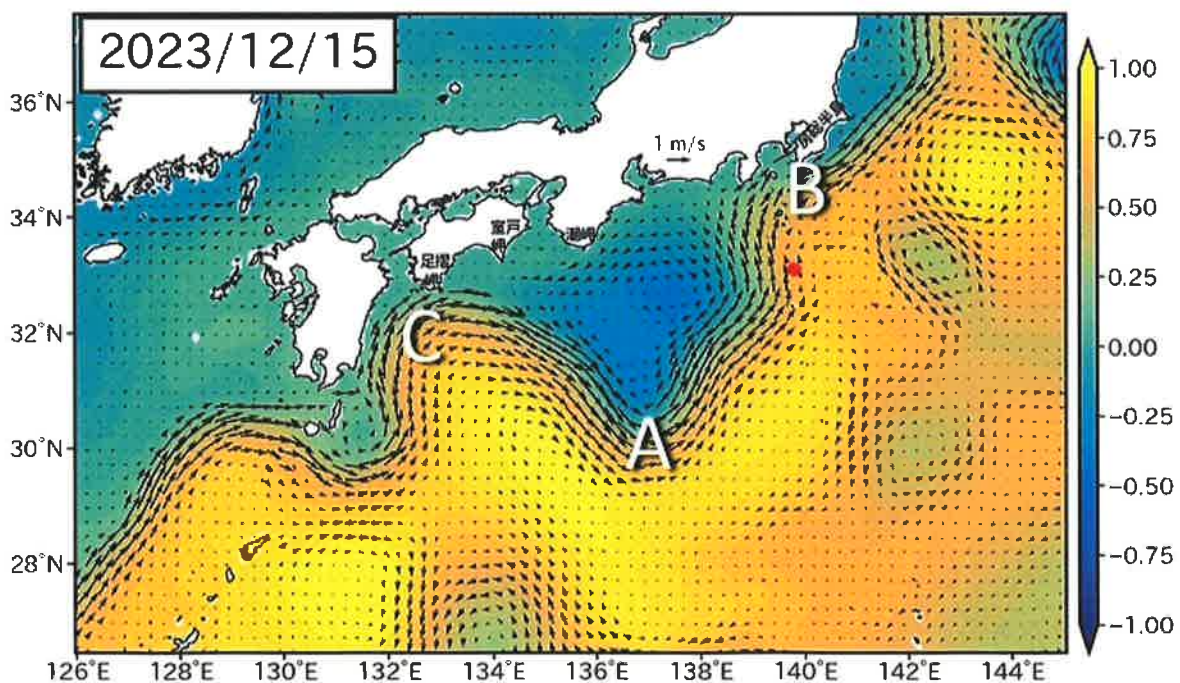
特に、スルメイカは2010年代半ばからの不漁が今も続いています。なぜ、スルメイカが急に減ってしまったのか。そして、資源の復活に向けて、どのようなことをすればよいのか。スルメイカの資源変動の原因は、ふ化した幼生の生き残りに影響する環境変化なのか？それとも漁獲の影響なのか？秋生まれ群は、対馬海峡から南西日本海で生まれ、主に日本海を回遊しています。2000年代半ば以降の漁獲量の減少傾向は、産卵場の10月までの高水温化に伴って、11月から12月へと産卵期が遅くなったためと推定しています。

秋生まれ群は日本海の対馬暖流の大きく3つの分流に沿った回遊ルートで北上して成長し、その後産卵のために南下しています。この中で、最近では「夏～秋の沿岸ルート」が高水温であるため、より水温が低く、回遊に適した「大陸ルート」と「沖合ルート」になることが多くなっています。その結果、日本や韓国の経済水域内の回遊資源が減り、特に日本側の漁獲の減少が顕著となっています。

一方、冬生まれ群は、主に1月から3月に東シナ海の大陸棚周辺海域で生まれ、その多くの幼イカは太平洋沿岸から沖合に拡がって成長しながら道東海域まで北上しており、その途中での回遊ルートでの漁獲死亡はほとんどありません。2010年代半ば以降からは、四国沖から紀伊半島にかけての「黒潮大蛇行」が続き、太平洋沿岸に沿ったスルメイカ幼生の北上ルートが断たれることが多くなっています（図2）。これらの複合的な海洋環境要因によって、冬生まれ群の激減が起きたと推定されています。通常、東シナ海で生まれた冬生まれ群のふ化幼生は、薩南海域を経由して四国沖に輸送され、黒潮の内側域を経由して黒潮属流へと運ばれて北太平洋で大きく成長するイカです。冬生まれ群の復活に向けて、黒潮大蛇行による産卵場からのふ化幼生の輸送経路での大量死亡が解消されない限り、この群の復活は難しいのが現状です。

現在のところ、黒潮属流へと輸送されるふ化幼生の大量供給の見込みがない限り、冬生まれ群の加入増加の可能性は少なく、その可能性を見出すためには、黒潮大蛇行時の繁殖時期における産卵期間中の親イカの保護を推奨することが強く望まれます。親イカの保護は成熟した雌イカの保護が不可欠であり、現実的には、完熟した雌の成熟親イカをできる限り確保して産卵させることが強く望まれます。

図2. 黒潮大蛇行の事例（2023年12月15日）



1. 水産・海洋に関する学術研究機関の集積

『JAMSTEC との包括連携協定事業「深海のせかい」』 R6.2.3

国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）および函館市、当機構で締結している三者包括連携協定事業として、小学生以上を対象に海の魅力を知ってもらうためのイベント「深海のせかい」を函館蔦屋書店で開催しました。

当日は、有人潜水調査船「しんかい6500」の元パイロットである JAMSTEC むつ研究所 小椋 徹也さんの講演と野菜やカップ麺等を用いた水圧実験を2回開催しました。また、「VR映像」で深海のせかいを探検！と題して、小学生は簡易ゴーグル、中学生以上はVRゴーグルを用いて深海の世界を探検しました。



深海に関する講演の様子



VRゴーグル体験の様子

当日は約400名の来場があり、「知らないことがいっぱい知れたので楽しかったです」「しんかい6500について、詳しく知れてよかったです。水圧実験が思ったより正解できてうれしかったです」など、本イベントを通して海や深海に興味をもってもらい、普段なかなか触れることのできない「深海のせかい」を一般市民の方々を知る良い機会となりました。

2. 地域と学術研究機関の連携

『令和6年度イカ資源評価と予測に関する講演会』 R6.10.4

函館は我が国でも有数のイカの水揚げ港であるとともに、イカ珍味に代表される水産食品加工業を中心に、イカ釣り機やイカ釣り漁船など機械・電気・製造といった製造業も集積した、文字どおり「イカの街」としての産業クラスターが形成されています。

しかし、昨年度、スルメイカの地元市場での取扱量は、317tと、統計を取り始めた2005年度以降で最も少なくなりました。こうしたことから、当機構では、これまで地域の漁業者や水産加工業者に向けて、スルメイカの資源動向や今期の見通しなどの情報提供を目的として、講演会を開催してまいりました。

講演会当日は、5名の専門家から太平洋・日本海のスルメイカの資源動向や漁況についての講演や、北海道周辺のスルメイカの漁況状況、主要イカ類（アカイカ科）の漁獲動向について報告が行われました。報告会では、産卵場である東シナ海の水温が高く、東シナ海から北上する個体が少ないことや、黒潮の大蛇行による回遊ルートの変遷など、イカの北海道周辺への北上を妨げる要因などについて報告されました。

オンラインでの開催となりましたが、道南地域の漁業者や水産加工業者などの水産業界関係者だけでなく、広く日本各地の水産関係者など約50名の参加がありました。

令和6年度
イカ資源評価と予測に関する講演会

参加無料
(要事前申込)

オンライン開催：2024年10月4日（金）14:00～17:00

1. 開会挨拶 一般社団法人函館漁業協会 函館市庁舎 函館商工会議所 函館商工 函館 市長

2. 講演

講演1. 「日本海のスルメイカの資源動向と漁況」
 藤山 文雄氏 国立研究開発法人海洋研究開発機構 資源評価 水産資源評価課
 水産資源評価センター 水産資源評価課 水産資源評価課 水産資源評価課

講演2. 「太平洋のスルメイカの資源動向と漁況」
 松井 明氏 国立研究開発法人海洋研究開発機構 資源評価 水産資源評価課
 水産資源評価センター 水産資源評価課 水産資源評価課 水産資源評価課

講演3. 「2024年度漁期前半のスルメイカの漁況と調査船調査結果」
 木村 俊介氏 国立研究開発法人海洋研究開発機構 資源評価 水産資源評価課
 水産資源評価センター 水産資源評価課 水産資源評価課 水産資源評価課

講演4. 「主要イカ類（アカイカ科）の資源と漁獲の動向」
 西澤 文吾氏 国立研究開発法人海洋研究開発機構 資源評価 水産資源評価課
 水産資源評価センター 水産資源評価課 水産資源評価課 水産資源評価課

講演5. 「スルメイカの不適要因を探る」
 松井 泰隆氏 一般社団法人函館漁業協会 函館市庁舎 函館商工会議所
 函館商工 函館 市長

3. 閉会挨拶

申込方法 申込締切：2024年9月30日（月）

●参加希望の方、WEBフォームまたはメールでお申込み下さい。
 → <https://forms.gle/YNhfJELER1L3DBLA>
 → office@marine-hakodate.jp

●メールでお申し込みの方は、氏名を「イカ資源評価会」とし、
 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名 氏名
 メールが届かない場合は下記問い合わせ先にご連絡ください。
 ●電話：FAXでのお申込みは受け付けませんのでご了承ください。

お問い合わせ 一般社団法人函館漁業協会・函館市庁舎 函館市庁舎 函館市庁舎 函館市庁舎 函館市庁舎
 TEL: 0133-21-4700 FAX: 0133-21-4700 (E-mail: office@marine-hakodate.jp)
 〒040-0201 函館市本町1-1-1 函館市庁舎 5F 501号室

オンライン講演会のチラシ

2. 地域と学術研究機関の連携

『キングサーモン完全養殖技術研究事業』

近年、函館市では海洋環境の変化などから水産業界が深刻なダメージを受けており、その対策の一つとして「つくり育てる漁業」の推進に向けた取り組みを始めました。対象種としてブランド力が高く高価格帯で取引されることが期待されるキングサーモンを設定し、令和3年度より完全養殖技術の確立に向けた取り組みを進めています。

本事業は、函館市、北海道大学大学院水産科学研究院、当機構との共同研究です。当機構はキングサーモンの親魚確保や種苗生産、飼育試験などを行っています。今年度は南かやべ漁協管内の定置網で混獲されたキングサーモン44匹（昨年度70匹）を入手、海洋研究センターに輸送し飼育試験やサンプリングを実施しました。今年度に採捕された個体は平均体重9kgと例年より大型で、雌雄の比率は雌77%、雄23%でした。過去3年間では、雌より雄の方が多く採捕されており、これまでと違った採捕結果でした。今年度も飼育期間中に雌雄ともに成熟させることに成功し、令和4年度から3年連続で稚魚を得ることができました。令和4年度

に作出したキングサーモンは平均800gを超えるサイズまで成長しました。昨年12月にはこのうちの一部の魚を淡水から海水に馴致し、実際に海面生簀を用いての養殖試験も始まりました。今後に向けて、摂餌性や成長性などを調べていきます。海面試験に用いなかった魚は今後の完全養殖に向けて大事に育成していく予定です。また、令和5

年度作出魚では、系統や飼育環境、雌雄の違いが成長速度に与える関係や、いつ海水に適応する能力を獲得するかなどを調べています。今年度作出した稚魚に対しても令和5年度作出魚の試験結果を踏まえつつ、成長速度を早められる飼育条件も調べていきたいと考えています。

当機構では、引き続きキングサーモンの完全養殖技術研究のベースとなる試験飼育を継続しながら、人工授精や孵化など種苗生産技術に必要な基礎的知見の集積や、将来の事業化を見越しての効率的な飼育手法の検討を行っていく予定です。



令和4年度作出キングサーモン



天然成熟オス



天然成熟メス


2. 地域と学術研究機関の連携

『函館マリカルチャープロジェクト』 (内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」)

函館市では、令和4年度から「魚介藻類養殖を核とした持続可能な水産・海洋都市の構築」の実現を目指した事業（通称：函館マリカルチャープロジェクト）を進めています。

この事業では、「キングサーモン完全養殖研究」、「マコンプ完全養殖研究」および「大学改革・人材育成」を主たる3本柱とし、魚類養殖が排出するCO₂を海藻養殖や天然海藻資源が吸収するCO₂でオフセットする”地域カーボンニュートラル”を達成するとともに、養殖産業群の形成と企業・若者の地域定着を企図する取り組みを行っています。



「函館マリカルチャープロジェクト」ポータルサイトはこちらから ⇒ 

「キングサーモン完全養殖研究」においては、令和6年度も3年連続で天然魚からの人工授精による孵化に成功し、幼魚の中間育成試験やオリジナル餌料による給餌試験および海面養殖適地調査のための海洋観測や様々な調査などが行われています。

また、昨年12月には、令和4年度に作出した人工種苗を函館漁港内に設置した生け簀へ投入し、海面養殖試験を開始しました。なお、この海面養殖試験は本年6月下旬まで行われる予定です。



令和6年度作出種苗の飼育



令和4年度作出種苗の海面生け簀への投入

「マコンプ完全養殖研究」においては、成熟誘導技術の改良と、成熟誘導原理を普及させるために各漁協への成熟誘導の技術指導による社会実装を開始するとともに、成熟誘導コンブの品質向上のためのヒドロゾア対策試験も行っています。

また、海底堆積物中のアルギン酸の効率的な測定手法を確立したほか、乾燥コンブの風味制御技術や生コンブの保存技術・加工技術の研究開発が行われ、ウニ除去による天然藻場変化の調査やウニ殻を利用した藻場再生基材の研究開発も進められています。



ヒドロゾアの付着したコンブ



藻場モニタリング調査

「大学改革・人材育成」においては、CREEN 人材育成カリキュラムの令和7年4月からの本格実施に向け、北海道大学地域水産業共創センターと市内の大学・高専が連携して「水産学演習」「起業家育成演習」の必修科目および選択科目の試行が行われています。

また、CREEN 人材育成プログラムの一環として立ち上がった「函館をもっと良いまちにプロジェクト」を担う学生団体”ISARIBI with”では、市内の大学生および高専生70名以上が参加する5つのプロジェクトが企画・実施されており、市民と学生が協働し、地域の課題解決に向けた新しい地域共創の活動が進められています。



コンブ洗浄作業（水産学演習）



ISARIBI with 活動報告会での発表

「マーケティング部会」では、函館真昆布のプロモーション活動や販路拡大を目指した取り組みとして、「函館マリンフェスティバル 2024」「はこだてグルメサーカス 2024」「はこだてカルチャーナイト 2024」に出展するとともに、函館葛屋書店において「函館真昆布展」を開催しました。

また、神戸市で開催の「どさんこ しまんちゅフェスティバル with 神戸・三宮 2024」や、越谷市で開催の「北海道フェア」などにおいて、函館真昆布の価値と魅力をPRしました。



「函館真昆布展」



「どさんこ しまんちゅフェスティバル」

当機構では、函館市からの委託を受けて本プロジェクトに係る情報発信等の支援業務を実施しており、ホームページ、YouTube およびXでの情報発信のほか、各種イベントへの参加や小中学校への出前授業でのプロジェクト紹介や、各団体から申し込みのあるマリカルオープンセミナー実施などによる情報発信を行うとともに、新たに「函館真昆布」ポータルサイトを開設し、「函館真昆布」のPR活動も行っています。



銭電沢中学校でのプロジェクト紹介



「函館真昆布」ポータルサイト ⇒



3. 水産海洋と市民生活の調和

『函館マリンフェスティバル2024』 R6.7.13-14



「海のふしぎ」についての実験

「海の日」にちなんで2日間にわたり、「函館マリンフェスティバル2024」を開催しました。

本イベントは、「函館国際水産・海洋都市構想」の実現に向け、産学官及び市民が力を結集して、各種施策を推進するとともに、市民一人ひとりが「海」を知り、「海」と親しみ、「海」とふれあう生活との関わりを深めることにより、構想への関心を高め、構想の推進に繋げることを目的とした市民参加型イベントです。

今回は「海洋研究センター開設10周年記念」事業と位置づけ、両日とも先着150名（お子様限定）に来場プレゼントを配布したほか、JAMSTEC・函館市・当機構の包括連携協定事業として「あなたの知らない海のふしぎ」をテーマに、JAMSTECの研究者を招いて、「深海のせかい」や「海のふしぎ」についての講演と深海の高い水圧を再現する水圧実験や海の流れについての実験を行いました。参加された皆さんは、普段目にしていない物が深い海の中でどう変化するのかや身近な海で起きている海の酸性化などについて興味深く聴講していました。

子どもたちに大人気の「タッチプール」では、函館近郊にすむヒトデやヤドカリ類、カニ類、ウニなどを展示し、ウミウシなど小型の生物は水槽で動きをじっくり観察しました。最初はおっかなびっくりだった子どもたちも、専門スタッフの解説を聞きながら普段触れることのない生き物に直接触れる貴重な体験となりました。

毎年恒例の「海藻おしばづくり・海藻万華鏡づくり」や「海と地球のペーパークラフトづくり」では、多くの親子連れが思い思いの作品づくりを楽しんだほか、1日目は、「表千家流学校茶道会」、2日目は、函館水産試験場の協力による「マリン縁日」も行われました。

2日間を通して、当研究センターの目玉である大型実験水槽に、アブラツノザメやホシザメなどを群泳展示し、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの協力のもと、水中カメラを駆使し、よ



大人気の「タッチプール」



ちびっ子に大好評の「マグネットつりぼり」

り間近でサメたちを観察できる「魚類の行動観察と群泳展示」をはじめ、海に触れる多彩なプログラムが行われました。今年度は、新たに「マグネットつりぼり」も開催し、実物大の魚のパネルが釣れる楽しみもあり、まだ釣りを経験したことのない小さなお子さんをはじめとして多くの子どもたちで賑わい、嬉しそうに釣った魚と写真撮影している姿が印象的でした。

また、函館マリカルチャープロジェクトの一環で、昆布水の試飲やキングサーモンの南蛮漬けも提供しました。

海の日記念イベントでは、岸壁で「函館港で活躍する官庁船見学会」が行われ、函館水産試験場の「金星丸」などが係留し、多くのお客様が船内を見学し大盛況でした。

今回は、初めて市内の中高校生もスタッフとして参加し、両日とも天候に恵まれ、2日間で8,458名の来場となり、会場は本イベントを楽しみに来場いただいたお客様で賑わいました。

当機構では、「海」と市民生活との調和を主要施策として、今後も広く市民が「海」に親しみ、「海」とふれあう生活との関わりへの関心を高めるイベントを企画・実施して参ります。

3. 水産海洋と市民生活の調和

『はこだてカルチャーナイト2024』R6.9.20



ミニタッチプール

函館市内の文化施設などを夜間に開放し、家族そろって地域の文化に触れるイベントである「はこだてカルチャーナイト2024」が、はこだてカルチャーナイト実行委員会の主催により開催されました。

当機構も趣旨に賛同し、海洋研究センターを夜間開放し、「海藻おしば・万華鏡づくり」をはじめ、「ミニタッチプール」「マグネットつりぼり」「キングサーモン若魚の展示」「函館マリカルチャープロジェクトのPR」を行いました。

また、同センターの敷地内において、北海道開発局函館開発建設部による車両展示と屋外壁面での巨大PR動画をはじめ、館内では、函館税関による「なりきり検査官体験」のほか、北海道ガス(株)による「サイエンスショー」などが行われました。

その他、各出展団体のマスコットキャラクターも登場し、多くの子どもたちと触れ合うなど、当日は親子連れを中心に1,023名が来場し、大盛況のうちに終了しました。



海藻万華鏡づくり

小中高校等の体験学習の受け入れ

令和6年度は、函館市内および道内外の幼稚園・保育園・小学校10校、中学校5校、高校3校など、国内・国外含め約450名が海洋研究センターの見学に訪れました。当日は、海洋研究センターおよび函館の水産業の現状について講義を行ったほか、施設見学の際は普段入れないバックヤードでの飼育魚への餌やり体験、スルメイカの観察などを行いました。また、各学校の希望に応じて、キングサーモンの解剖実習体験も行い、最初は魚を触るのに躊躇していた生徒さん達も、終了後は「楽しかった。魚の構造を初めて知った」など、解剖実習を通してこれまで触れることがなかった魚の構造などを知る良い機会となりました。更に、今年度は、初めてセンター外での出前体験実習も行いました。

海洋研究センターでは、現在函館市からの委託で取り組んでいる函館マリカルチャープロジェクトに関する内容や、各学校などの要望に応じて、施設の見学や体験学習の受け入れを行っ



機構職員による実習の説明

ています。各学校での課外活動や自主研修のプログラムにもよりますが、海洋研究センターに関する簡単な説明と館内見学で1時間、これ以外の体験学習で2時間程度の時間が必要になります。また、各入居機関による研究紹介・体験学習の希望も承っています。4階の展望台または1階のラウンジでお昼休憩も可能ですので、水産・海洋の教育の場として、海洋研究センターを是非ご活用ください。



函館白百合学園中学高等学校の生徒さんによる体験学習の様子

4. 推進機構の運営に関すること

令和6年度理事会・評議員会の開催状況

第1回理事会は、理事6名、監事1名の出席により、令和6年5月27日に開催し、令和5年度事業報告ならびに決算報告、定時評議員会の招集について審議され、全ての議案について異議なく原案どおり承認されました。

定時評議員会は、評議員5名の出席により、令和6年6月13日に開催し、令和5年度事業報告ならびに決算報告、理事1名の辞任に伴う後任の選任について提案し、全ての議案について異議なく原案どおり承認されました。なお、新たな理事として、北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長の向井 徹氏が選任されました。

	氏名	役職		氏名	役職
評議員	久保 俊幸	函館商工会議所会頭 ※評議員長	理事	石尾 清広	函館水産連合協議会会長 ※代表理事
	境 勝則	函館商工会議所副会頭		古伏 隆二	函館特産食品工業協同組合理事長
	安井 肇	北海道立工業技術センター長		中村 正俊	函館市内漁業協同組合長連絡協議会前事務局長
	都木 靖彰	北海道大学大学院水産科学研究院長		村瀬 充	函館商工会議所副会頭
	鈴木 恵二	公立はこだて未来大学学長		向井 徹	北海道大学大学院水産科学研究院副研究院長
	阿部 恵	函館工業高等専門学校長		嵯峨 直恆	北海道大学名誉教授 ※業務執行理事
	坂田 憲治	函館市内漁業協同組合長連絡協議会会長		阿部 慶太	函館市企画部長
	大泉 潤	函館市長		監事	西谷 裕幸
顧問	松本 榮一	函館商工会議所名誉会頭	吉村 健太郎		函館水産研修会幹事長
	伏谷 伸宏	東京大学名誉教授	須田 新崇		函館港湾振興会会長

編集後記

函館市は、多種多様な水産根付資源に恵まれていたことや津軽海峡およびその近海がスルメイカの回遊ルートになっていたことなどから、沿岸漁業やイカ釣り漁業が盛んになったほか、函館港が母船式さけ・ます漁業（北洋漁業）の基地であったため、水産加工業など多くの関連産業が発展しましたが、一方で、アメリカやソ連が漁業専管水域を200海里に拡大したことなどによる北洋漁業の終焉が地域に大きなダメージを与えた歴史も有しているなど、漁業の繁栄と衰退が函館市の産業や経済に大きな影響を及ぼしてきました。

そしてまた、地球温暖化に伴う海洋環境の変化が水産資源に大きな変化をもたらしているほか、日本海大和堆における外国漁船による違法操業などの要因も重なって、10年近くもスルメイカの不漁が続いております。

昭和20年代には「函館はイカの10本の足にすがっている。」と言われたほど、函館のまちの発展には欠くことのできないスルメイカの資源回復が見通せない中で、漁業や水産加工業への影響は深刻さが増すばかりです。

適切な資源管理と水産業の成長産業化を両立させることを目的に70年ぶりに改正された漁業法が令和2年（2020年）12月に施行し、国では新たな資源管理システムを推進しておりますので、スルメイカ資源の一日も早い復活を切に願っておりますが、一方では、これまでのように天然資源だけに依存することはできないとも考えております。

世界的にも天然資源の漁獲量が限界に達しておりますが、国連食糧農業機関（FAO）が発表した「2024世界漁業養殖業白書」によりますと、魚介類の養殖量が漁獲量を初めて上回りました。

世界的に人口の増加が続いている中で、動物性タンパクを魚介類に求める傾向が強まっており、魚類養殖が今後ますます増加していくことが想定されます。

現在、函館市では、内閣府の「地方大学・地域産業創生交付金事業」の採択を受け、北海道大学大学院水産科学研究院および当機構の三者で「函館マリカルチャープロジェクト」を進めており、このプロジェクトの中でキングサーモン養殖事業の社会実装を目指しておりますが、この取り組みを通じて、かつて水産業で繁栄した函館を少しでも取り戻すことができると考えているところです。